



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414

Lincoln NE 68506 USA

www.nsdapao.org

#1159

01.06.2025 (136)

戦争中のヒトラー 何が起こったのか？

A.V.シャーフェンベルク 著

パート6

第5章

チェコとポーランドの火薬樽

「敵対する4つの新聞は、千本の銃剣よりも恐れられる」。

ナポレオン・ボナ
パルト

第一次世界大戦を終結させたヴェルサイユ条約は、次の世界紛争を引き起こした根本的な原因として、歴史家の間でよく引き合いに出される。気弱なドイツの政治家たちが強要されて署名したこの条約は、敗戦国民からの合法的略奪にほかならない。当然ながら、勝利した連合国側は、自分たちが戦争に踏み切った動機は純粹に防衛的なものだと考えていた。1871年

にセダンで屈辱を味わって以来、フランスを支配してきた叛乱政治、自国の優位を確保するため、大陸の主要国が誰であろうと敵対するイギリスの伝統的な政策、セルビアに救世主として現れることで、スラブ諸国を皇帝の下に統一しようとするロシアの願望などは、ヴェルサイユの広間では決して語られることはなかった。戦前のドイツの唯一の「罪」は、産業競争者になったことだった。1918年、ドイツの炭田を奪い、国民を凍えさせ、飢えさせ、永久に困窮を強いるほど厳しい賠償金を課した条約制定者たちを動かしたのは、ドイツの新たな富であった。それゆえ、「大戦」の責任をドイツ人だけに負わせる経済的必要性が生じたのである。

ヴェルサイユ条約は、敗れた敵国からの略奪を隠すために作成された形式的な文書にすぎない。この条約を企てた国際的な犯罪者たちは、オーストリア＝ハンガリー帝国と帝政ドイツの分裂した残党が、戦争と革命によって分断されたヨーロッパ大陸をつなぎ合わせることで、その極悪非道さをさらに際立たせた。食欲と復讐と無知にまみれた条約制定者たちは、無関係で、しばしば対立する民族が住む地域全体を、人為的に作られた新しい国家に分割した。数百万人のポーランド人、ドイツ人、ハンガリー人が突然チェコスロバキアに、さらに数千人のドイツ人がポーランドとリトアニアに、さらに数千人のポーランド人がハンガリーに、ハンガリー人がルーマニアに、などなど。スデーテンランドだけでも、280万人のドイツ民族がチェコ国境の後ろに取り残され、祖国から切り離され、公然と敵対する外国政府の統治下に置かれた。25万人以上のポーランド人が占領していたポーランド領625平方マイルは、チェコスロバキアに引き渡された。ハンガリーは、775,000人の国民とともに7,500平方マイルの領土を失った。

もし、アメリカが戦争に負けて、アメリカ人の住むワシントン州、モンタナ州、アイダホ州をカナダに、カリフォルニア州、テキサス州、アリゾナ州をメキシコに割譲せざるを得なかったとしたら、わが国は、第一次世界大戦後にドイツ、ポーランド、ハンガリーが直面したのと同じような状況に陥っただろう。そして、居住していたドイツ人、ポーランド人、ハンガリー人が、しばしば彼らに課せられた残酷な状況に異議を唱えるたびに、彼らの抗議は「ベネス大統領のプラハ政府によって無慈悲に粉砕された」(Chant, 5)。レオン・デグレル将軍が観察したように、ヒトラーの有無にかかわらず、このような混乱がやがて新たな国際紛争に発展することは避けられなかった。

1933年以来、総統が民族の誇りを回復させた帝国から切り離された地域のドイツ人は、祖国への復帰を切望していた。スデーテンラントでは、国際監視団が監視した国民投票で、ドイツ人少数派の90%以上が帝国への復帰を希望した。1938年5月、チェコ政府がスデーテンランド人を祖国に帰すことを拒否し、軍隊を動員すると、ヒトラーは国防軍を呼び出すと脅した。そのときまでに、ヒトラーは、国際的な理解を得るためのあらゆる努力にもかかわらず、連合国が何らかの形でヒトラーに対して戦争を仕掛ける決意を固めていることを認識していた。ドイツはまだ戦闘準備ができていなかったが、フランスもイギリスもまだ戦闘準備ができていなかった。しかし、彼らの再軍備のペースでは、あと数年で圧倒的な軍事的脅威をもたらすだろう。例えば、イギリス空軍は1930年代にドイツ軍の全兵力を合わせたよりも多くの再軍備費を費やした。ドイツ帝国は、連合国が抵抗できないほど強大になる前に、自国の防衛を成功させることしか望めなかった。そのため総統は、10月1日までにスデーテンランド問題が解決されなければ、チェコスロバキアに対する武力作戦を開始するよう指揮官に通達した。

ヨーロッパが戦争の銃剣を突きつけられている状況で、平和を守れるのは、ベニート・ムッソリーニのような個人的権威と外交手腕を持つ人物だけだった。ムッソリーニはミュンヘンで、土壇場の緊急4カ国会議を招集した。英語、フランス語、ドイツ語に堪能なムッソリーニは、国際的なマスコミの絶え間ない煽動にもかかわらず、スデーテンラントと本来の祖国を再会させることが敵対を回避する唯一の方法であることを全代表団に理解させた。一方、チェコスロバキアの指導者としてよく知られたエドワード・ベネスは、マスコミ、ニュース映画、ラジオ番組で、ファシストの強引さと連合国の威圧の犠牲者として、高貴で哀れな人物として世界中に描かれた。「同時に、「政治的にも道徳的にも弱いチェコ大統領ベネス博士は、戦争への気概がなく、辞任し、ポケットに1万ドル（ソ連からの寄付金）を入れてフランスに逃亡した」（48）。

ドイツ国防軍がチェコスロバキアに侵攻するわずか2日前、ミュンヘン協定が調印された。ヨーロッパを自殺から救ったドゥーチェはローマで英雄の凱旋を果たし、スデーテンラント国民は何事もなく帝国に戻った。一方チャーチルは、『フォーカス』に掲載された自分自身と仲間の戦争屋を引き合いに出し、「われわれは完全無欠の敗北を喫した」（Innes, 13）と憤慨した。

しかし、屈辱を味わったチェコの政治家たちは、ヴェルサイユ条約によって支配下に置かれた他の諸外国の人々に不満をぶつけた。スロバキア人とハンガリーのルテニア人は苦しい抑圧に苦しみ、アドルフ・ヒトラーにスデーテンランド人に与えたのと同じような援助を訴えた。さらにヒトラーは、SDからチェコ人が離陸後30分以内にドイツ軍の目標を攻撃できるソ連爆撃機のための空軍基地を密かに建設していることを知ると、チェコスロバキアを占領し、ボヘミアとモラヴィアに分割した。第一次世界大戦後の地図を一目見れば、この人造国家がドイツを永久に機能不全に陥れるために、短剣を突き刺すようにドイツ領土の奥深くまで押し込んでいったことがわかる。

「チェコスロバキア」は、フランスとイギリスの政治家たちが、自分たちが再建しようとしている地域のことを何も知らずに作り出した人工的なものだった。実際、チェコスロバキアをでっち上げた彼らの真の目的は、中欧を常に混乱（つまり無力）状態に保つことだった。つまり、民族的、言語的、文化的に関連のある人々が、それぞれの共同体を形成することを認めたのである。つまり、民族的、言語的、文化的に関連する人々がそれぞれの共同体を形成することを認めたのである。彼は、カトリックのモンシニョール、ヨゼフ・ティソのもとでスロバキア人に自由を与え、ハンガリーがルテニアで離散していた同胞と再会することを認めた。チェコの危機を語るとき、主流派の歴史家は必ずといっていいほど、ヒトラーがテシェンのポーランド人を含むこうした非ドイツ系少数民族に自由を与え、同様に祖国への帰還を許可したことを評価しない。ヒトラーとムッソリーニが仲介した和解は、「ポーランドが長年望んでいたハンガリーとの共同境界を与えた」（Innes, 35）。同じ年の4月、スペイン内戦の勝利でマドリッドを通過するドイツ空軍の飛行士たちの横を、ポーランドのパイロットたちが凱旋行進した。悲劇的なことに、そのわずか5ヵ月後、彼らは互いに敵対することになる。

ヒトラーの初期の外交的勝利は、1934年のポーランドとの不可侵条約であり、その後数年にわたって、ソビエトからヨーロッパを守るための軍事同盟の秘密提案が続いた。1月、ヨーゼフ・ゲッベルス帝国首相はワルシャワ政府首脳に人格的で非常に好意的な印象を与え、両国は顕著に接近した。ワットの観察によれば、「訪問は成功だった」（325）。翌年、ピウスツキ元帥はヘルマン・ゲーリングを迎え、彼はロシアに対する軍事同盟を提案した。ゲーリングはロシアとの軍事同盟を提案し、ロシアが敗北し

た後、ポーランドはウクライナ全土を獲得することになる。このようなドイツとポーランドの連合は、西側連合国にとってもソビエト連邦にとっても取り組むには強力すぎる共同軍を創設することになり、同時にチャーチルとその戦争狂の一派の陰謀を阻止することになった。

ゲーリングの提案は、現代史の大きな転換点のひとつであった。もしそれが受け入れられていたら、事態の流れは劇的に変化し、共産主義の巨塔は転覆していただろう。さらに、この時ソ連は政治的にも軍事的にも混乱状態にあり、スターリンが軍や政治局の高官を偏執狂的に粛清していた。

ドイツ軍とポーランド軍による1930年代後半のソ連侵攻は、1941年のバルバロッサ作戦よりもはるかに成功の可能性が高かっただろう。その頃には、赤軍はドイツを攻撃する準備ができていた。ピウスツキがゲーリングの寛大な申し出を受け入れていれば、ポーランドは真に重要なヨーロッパの大国として台頭し、来るべき恐ろしい運命を避けることができただろう。それどころか、ゲーリングは、第三帝国とソビエト連邦に挟まれた不安定な立場を無視して、自国がすでにヨーロッパのパワーブローカーであるかのように装い、ドイツ軍をロシア軍に翻弄するという危険なゲームに興じ続けた。合理的に一方の国家に味方するのではなく、両方を操ることを選んだのだ。

それでもヒトラーは、ピウスツキと近代化したポーランドの双方に心からの賞賛を表明し続け、1935年5月、帝国議会で「われわれは、真の民族主義者の理解と心からの友好をもって、ポーランド国家を偉大で民族意識の高い人々の故郷と認める」と宣言した。翌月、ドイツとポーランドの代表は協議を開始し、6ヵ月後には貿易協定が結ばれた。ワットが指摘するように、「ドイツはポーランドにとって圧倒的に重要な輸出市場であったため、この条約はポーランドにとって極めて重要であった。これまでドイツは、ポーランドからの輸入品に関税や割当を恣意的に変更することで、ポーランド経済に大きな打撃を与えてきた。この新しい協定はポーランドに最恵国待遇を与え、両国間の多くの経済紛争を解決した」(327)。

このような模範的な関係は、ソビエト・ロシアの脅威の増大とともに、ゲーリングの提案した軍事同盟を再考するポーランド人を徐々に獲得し始めた。親ライヒの意思表示として、ワルシャワ政府はスペインでヒトラーのコンドル軍団と飛行するためにポーランド航空機を派遣した。開戦のわずか8カ月前、ヒトラーは、1939年1月5日にポーランド外相がベルヒテスガーデンを訪問した際、ヨーゼフ・ベックに、「ドイツは、ロシアで起こ

るかもしれないことのために、強く民族主義的なポーランド国家が存在し続けることに大きな関心を持つだろう。それとは別に、強力なポーランド軍の存在は、ドイツの負担をかなりの程度軽減した。ポーランドがロシアとの境界に保持していた師団は、ドイツが同様の軍事的負担を負うことを免れた」（イネス、31）。

一方、国際的な扇動者たちは、チェコスロバキアでのムッソリーニの和平の勝利に深く不満を抱き、敵対関係を再燃させる別のトラブルスポットを探し回った。それがダンツィヒだった。スデーテンランドと同様、この中世の都市も20年前、ヴェルサイユの憎むべき策略家たちによってドイツから切り離されていた。置き去りにされた市民たちは、同じように祖国との再統一を切望していた。しかし、プロイセン東部境界への細長い回廊という、どうしようもない仕掛けで結ばれていた。ヴェルサイユ条約によって、約150万人のドイツ人がポーランドに取り残された。

このジレンマを友好的に解決するため、ヒトラーはダンツィヒを結ぶ高速道路と鉄道の建設資金を提供することを申し出た。ドイツの古都へのアクセス向上と引き換えに、これらの建設にはポーランドが税金を投入することになり、ポーランドはダンツィヒまでの鉄道も自前で運営することになった。ポーランドは、領土主権を損なうことなく、継続的に多額の利益を得ることができた。「今この瞬間、国家社会主義による政権奪取から6周年を迎えたポーランドは、「この協定（1934年の独ポーランド不可侵条約）の重要性について、友好的で平和的な国家間で意見の相違はほとんどない。昨年、ドイツとポーランドの友好関係は、ヨーロッパの政治生活における平和の保証としての価値を証明した」（イネス、33）。

1938年10月から、ダンツィヒに関する交渉は緊急性を伴わずに友好的に進められ、ヒトラーは互いに満足のいく結果を確信していた。しかし、ベルヒテスガーデンからわずか11日後、ヨーゼフ・ベックが反コミンテルン条約への参加を冷たく断ると、ヒトラーは不愉快な驚きを隠せなかった。ポーランドは、第三帝国、ファシスト・イタリア、日本の軍事力によって支えられていたため、ロシア境界におけるソ連の野望に関するさらなる不安から免れることができただろう。独ポーランド不可侵条約締結5周年を祝うためにドイツ外務大使がワルシャワを訪れた際、ポーランド人はダンツィヒについて言及することを拒否し、ドイツ代表団を冷たい態度で迎えた。

3月、ワルシャワ政府は、ポーランドが経済的、特に軍事的に多大な利益を得ることになる総統の寛大な提案を全面的に拒否し、ダンツィヒに関するこれ以上の話し合いを打ち切った。総統は大使を通じてポーランド側に状況を明確に伝えた：「ポーランドが明確な反ソ態度を示さなければ、独ポーランド協定は存続できない。ポーランドはドイツとロシアのどちらかを選ばなければならないことを理解しなければならない」（イネス、35）。同月、それまで友好的であったベックは、外交官仲間のゼンベック伯爵に、「われわれは自国の利益の限界を正確に知っている……その限界を超えると、ポーランドはノン・ポッサム（「われわれはできない」、不能の訴え、拒否）を表明するしかない」と述べた。簡単なことだ：我々は戦う！」。ベックの決意は、ポーランドをソビエト共産主義に対抗する重要な同盟国としてまだ頼りにしていたヒトラーには衝撃的であったろうし、ポーランドの態度の突然の変化が外国の外交官によって仕組まれたものだとは想像もつかなかっただろう。

ルーズベルト大統領のヨーロッパにおける秘密工作員であったウィリアム・C・ブリットは、1919年のウィルソン政権時代には政府高官であった。議会の調査によって、ソ連が国際的なユダヤ人ギャング団によってロシア国民に押し付けられた血なまぐさい専制政治に過ぎないことが明らかになったためである。このような判決に落胆した彼は政界を去ったが、ルーズベルトが大統領に就任して最初の国際的行動であるソビエト連邦を承認した後、F.D.R.によってアメリカ初の駐ソビエト大使として復職した。高度な親共産主義とファシズムへの不寛容を持つブリットは、異邦人国家間の正常な関係を解体するためのユダヤ人の最も貴重な道具の一人であった。

東ヨーロッパを旅した彼は、持ち前の外交手腕と大統領の個人的な代理人としての素晴らしい経歴を活かし、ポーランド政府高官を畏怖させた。ブリットは、ドイツ軍をダンツィヒに追い詰めるよう促した。戦争は避けられないが、それまでにイギリスとフランスは西から帝国に侵攻し、総統はその渦中に巻き込まれる。ポーランドはドイツ東部の残りを手に入れることになった。ポーランドがすべきことは、ヒトラーの攻撃を誘発し、英仏が救援に来るのに十分な時間、ヒトラーを食い止めることだった。ワルシャワの世間知らずの指導者たちは、食欲と傲慢のためにこの見え透いた欺瞞に気づかず、外国の政治家の保証に国の存続を賭けた。

ポーランドで紛争の種を蒔いたウシジマは、フランスにそそくさと向か

い、フランス政府高官たちに、アメリカが対独戦争を支援することを確約した。1年も経たないうちに、ドイツ国防軍に屈服させられていたフランスのプルミエール、エドゥアルド・ドラディエは、ブレットが約束した「軍用機の雲」をアメリカに要請する有名なアピールを放送した。一週間後、ドイツ軍がパリに進駐。

ビュリットはロンドンに向かい、そこで英国首相と会談した。1941年、ネヴィル・チェンバレンはがんで亡くなる直前、ヨーロッパ第二次恫喝戦争のさなか、「ブリットとユダヤ人の絶え間ない働きかけがなければ、イギリスはポーランドをめぐる戦争することはなかっただろう」と告白した（Forrestal, 178）。チェンバレンは大日本帝国の友人ではなかったが、少なくとも当面は戦争を避け、イギリスの軍隊が国防軍に対抗できるほど十分に増強されるまで時間稼ぎをすることを心から望んでいた。彼は、『ニュース・クロニクル』紙の強烈な反独ジャーナリスト、イアン・コルヴィンに騙されていた。コルヴィンは、3月29日、首相に、総統は事前に準備された計画で可能な限り早い時期にポーランドを攻撃することになっていると嘘をつき、イギリスのポーランド政策を一人で変えてしまったのである。しかし、イギリスの保証の結果、不測の事態（ヒトラーのケース・ホワイト）はポーランドのために戦うことになった」（アーヴィング『ゲッペルス』f.293）。この欺瞞によって、コルヴィンは「戦争への均衡を傾けた」のである。

西側の「民主主義諸国」はヒトラーに戦争を仕掛ける決意を明らかにしたが、ヒトラーは戦争ができるだけ延期されることを願っていた。それでも、もし戦争に突入しなければならないのであれば、ヒトラーはドイツが最も成功する可能性の高い、自分たちの条件での戦争を望んだ。連合国の再軍備が全速力で進められていたため、時間は彼に不利に働いた。例えば、開戦の年の1939年、フランス政府はドイツの軍備費を上回っており、その大規模な空軍はヘルマン・ゲーリングのドイツ空軍よりも多額の資金を投入していた。米国のジャーナリスト、ダグラス・ブリンクリーによれば、1934年2月から、パリは空軍のためだけに毎年10億フランを費やしていた(68)。5年後、パリは3000機以上の航空機を配備し、ドイツ空軍よりやや少なかったが、ポーランド、オランダ、イギリスの空軍と合わせると、ドイツ軍は少なくとも3対1の確率で空戦で劣勢に立たされることになった。ポーランド、オランダ、フランス、イギリスの陸軍予備兵力は合

わせて約1000万人で、ドイツ軍の予備兵力を5対1で上回っていた。海上では、連合国はドイツ海軍の20倍の軍艦を保有していた。

猛烈な勢いで武装化する連合国によって自国の存立が脅かされようとしていることを痛感していたヒトラーは、ポーランド人に公平な解決策を提示し続けた。ポーランド人の頑なな態度は、8月27日と29日の時点で、文字通り開戦の数日前であったイギリスとフランス（彼らはビュリットによるアメリカの軍事援助の非公式な約束について考え直そうとしていた）にとってさえ、もはや我慢のならないものであった。彼らはワルシャワにヒトラーと交渉するよう促したが、ポーランドは断固として拒否した。同月、フランス大使がポーランド防衛のためにソ連軍の駐留を認めるよう提案したとき、ポーランド軍総司令官エドワード・リッツ・スミグリー元帥はこう答えた。ロシア人とは魂を失うだろう」（イネス、60）。ブレットのサイレンの歌に屈することで、彼らはその両方を失うことになるのだ。

数日後、総統はポーランド外相との直接会談の再開を要請し、危機を回避しようとした。総統は英国大使ネヴィル・ヘンダーソン卿に、「このような状況において、ドイツ政府は、全権を有するポーランド使節をベルリンに派遣するよう確保するために、英国政府の善意の申し出を受け入れることに同意する。彼らはこの使節が8月30日水曜日に到着することを期待している」（イネス、82）。その代わり、ベックはドイツ側に回答を与えることなく丸2日間待たせた後、ロンドンに飛び、外交官仲間のエドワード・ラチンスキー伯爵とともに、イギリスのハリファックス外務大臣と相互援助協定に調印した。この協定は、ポーランドが「いかなる外国の敵からも」攻撃された場合、イギリスの武力介入を保証するものであったが、戦後まで開示されなかった秘密の議定書では、ドイツだけが引き合いに出されていた。

総統は翌日の新聞で、ベックがいかなる交渉も蔑ろにする高圧的な態度をとったことを読んで初めて、何が起こったのかを知った。和平を訴えている最中に隣国から選ばれた指導者を拒絶するという前代未聞の事態は、意図的な挑発であり、その直後にポーランドが動員され、ドイツ国境付近で軍事演習が行われた。ドイツ・ポーランド戦争が勃発する3日前に、私はベルリンのイギリス大使に、ドイツ・ポーランド問題をザール地方の問題と同じように国際的な管理下で解決することを提案した。この提案は説明できない。英国政界の責任者たちが戦争を望んだため、それが拒否され

たにすぎない。

リッベントロップは、ポーランド人のドイツに対する機嫌が悪くなった前年の1月の時点で、ベルリンに戻る途中の外交官仲間にかつ打ち明けている。ヒトラーとしては、敵に包囲されることは許されなかった。銃撃戦が始まる前に、外交的に敵の裏をかく必要があった。ダンツィヒ国際連盟のスイス委員ヤコブ・ブルクハルトに言ったように、「私が引き受けることはすべてソ連に向けたものだ。西側諸国があまりに愚かで盲目で、このことを理解できないのであれば、私はロシアと協定を結ばざるを得ないだろう」。それゆえ、8月23日、彼はソ連と不可侵条約を結び、世界中に衝撃を与えた（彼のNSDAPの同志たちも含め、何人かは抗議して辞職した）。これは、ロシアとの関係を正常化することによって第二戦線の発展を阻止するよう、西側民主主義諸国が彼に強要した思い切った行動であった。

それゆえ、1939年8月に外務大臣をモスクワに派遣し、英国の対独包囲政策に反対するよう努めたのは、極めて困難なことであった」。そうすることで、彼はフランスとイギリスを賭博外交で打ち負かしたのである。両者ともスターリンに第三帝国に対する同盟を熱心に求めていたが、マーシャルは自国の再軍備を完了させるための重要な時間を確保できるドイツとの一時的な条約を好んだ。

赤軍のステファニス元帥の言葉を借りれば、「ソ連とヒトラーのドイツとの協定は一時的なものにすぎない。長くは続かせない」。ドイツ軍は、フランス軍との戦いに忙殺されている間に、われわれがドイツ軍の背後を突く準備をしているなどということを思い知ってはならない。1925年に『我が闘争』を執筆した時点で、「ロシアの現支配者は、同盟を守るどころか、立派に同盟を結ぶ考えもない」（『第二巻』第十四章）と書いていたヒトラーを、このような事態が驚かせることはなかっただろう。彼は、「ドイツは今日、ボリシェヴィズムの次の大きな戦争目標である」と正しく結論づけた。

カリフォルニア州モントレイにある米海軍大学院のラッセル・H・S・ストルフィ教授（歴史学）によれば、ソ連との戦争が始まったとき、「ヒトラーはかろうじてスターリンに先手を打ったようだ」。「最近発表された証拠と特に効果的な論証は、スターリンが1941年6月の早い時期にソ連軍の西部辺境への大規模な展開を開始したことを示している。この証拠は、スターリンが、西部に集中した戦力をできるだけ早く、おそらく1941年7

月中旬ごろに、ソ連のバルバロッサのために使用するつもりであったという見方を支持している。捕虜の供述も、ソ連が1941年中にドイツを攻撃するつもりだったという見方を裏付けている。西部辺境へのソ連軍の異常な配置は、その目的のためにそこに集結した極めて強力な兵力が総動員された攻撃のための攻撃的配置として最もよく説明できる」（マイケルズ、21）。

ホルスト・スレシナ氏は、バルバロッサ作戦の初日を経験し、ソ連軍のヨーロッパ侵攻の準備を目の当たりにした。「私たちは、ソ連軍の進撃が祖国と全ヨーロッパにもたらす恐るべき脅威の詳細を知る。ソ連の外交的、軍事的駆け引きや、スターリンとモロトフの恥知らずな要求から、クレムリンのボスたちが自分たちの時代が来たと考えていることがわかる。イギリスとの交渉、ドイツ、フィンランド、ハンガリー、ルーマニアの国境へのソ連軍の進撃は、ソ連の意図に対する最後の疑念を払拭した。ボリシェヴィズムは、ドイツに対する攻撃によって、世界革命の行進を開始する準備ができています。最初の（ドイツの）歩兵が東方へやってきて、荷を降ろされ、国境まで前進したとき、我々はロシア人の巨大な隊列が上がってくるのを見た。彼らはドイツ国境に分厚いネットワークを作り、その背後には巨大で果てしない隊列が、戦争史上最も大規模な動員のひとつを実行した」（8-11）。

戦後、赤軍第44歩兵師団第24歩兵連隊長のコスコフ少佐は、「ロシア軍は遅くとも2、3週間以内に自らの意思でドイツを攻撃しただろう」（ジョンソン、36）と認めている。帝国とロシアがまだ平和であった1941年5月5日、スターリンはフルンツェ陸軍士官学校の卒業生に、「われわれは今後2ヵ月以内にドイツと戦争を始めることができる。われわれは強くなったのだから、防衛から攻撃に転じなければならない」。米国防総省のロシア語翻訳者ダニエル・マイケルズの言葉を借りれば、「ロシアのアナリストは、ドイツ軍が先制攻撃を開始したのは、ソビエト軍が計画した動きの2、4週間前だったと推定している」（20）。

しかし、今のところ、ヒトラーは二正面戦争を避けるために、一時的にせよ、ロシアの弱者を手近に置くために、ソ連との取り決めが必要だった。ヒトラーはまた、8月25日に締結されたワルシャワとの条約で西側連合国を陥れることも狙っていた。この条約では、イギリスとフランスはポーランドに侵攻する「誰に対しても」宣戦布告を行うと明記されてい

た。ドイツが潜在的な侵攻国として意図されていたのは明らかだが、少なくとも公の場では、その名前は挙げられていなかった。ドイツとロシアがポーランドに侵攻した場合、連合国は自らの条約によって、侵攻した両国に宣戦布告する義務を負う。

しかし、ポーランドに戦火が及ぶと、民主主義諸国は大日本帝国に対して選択的に宣戦布告を行い、偽善の限りを尽くした。イギリスとフランスがドイツとロシアの両方を相手にしなければならないという見通しは、彼らにとってあまりにも大きなものだった。彼らはドイツへの宣戦布告を控えることはしなかったが、ソ連に対しては同じように行動しなければならなかったからである。

もちろん、ポーランドの救援に駆けつけるつもりなど毛頭なかった。ポーランド人は、イギリスとフランスが誓約を守り、西からドイツに侵攻してくるという確信のもとに、勇敢に粘り強く戦った。ポーランド人の首都防衛を鼓舞したのは、遠く離れた同盟国に対するこの強い信頼であった。たとえどんなに決意に満ちた抵抗であったとしても、それは悲劇的なほどに無益なものであった。西側の“民主主義”諸国はポーランド人を裏切った。彼らは皮肉にも、ポーランド人を反ナチスのための大砲の餌としか考えていなかった。ウィンストン・チャーチルはポーランドの降伏後、「ナチスの大軍から正義と善を守る英雄」と公言した。ポーランド人の敗戦を苦々しく思った彼は、彼らを「戦い方を知らない愚かなポラック」と侮蔑的に切り捨てた。それが、チャーチルらが彼らに要求し、彼らから得た戦争を提供してくれたことへの感謝のすべてだった。



NSDAP/AOは世界最大です 国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物

多くの言語の何百冊もの本

多くの言語の何百ものウェブサイト

SS Defender
against Bolshevism
by Reichsführer SS Heinrich Himmler

The Poisonous
Mushroom
Translated from the Third Reich Original
Der Giftpilz

Hitler
in Italy
Hitler in ITALIEN

SS Viewpoint - Vol. 9
Wife and Family

Theodor Fritsch
The Sins of
High Finance

Luftwaffe War Art
Die Luftwaffe im Bild

BOOKS - Translated from the Third Reich Originals!
www.third-reich-books.com

NSDAP/AO

Fight Back!

nsdapao.org

Contact us to
find out how
YOU can help!